

新入生18名を迎えて、教職大学院が新たなステージへ！

平成28年4月6日に入学式が、そして4月8日にガイダンスが行われ、いよいよ教職大学院の2年目がスタートしました。今年度は、栃木県教育委員会からの現職派遣教員10名、附属学校園からの現職教員1名、更には学卒者7名の計18名の大学院生を迎えることができました。1年生と2年生あわせて32名の大学院生が勢揃いし、宇大教職大学院はいよいよ新たなステージに突入することになります。

◆協働による学修のよさを活かして

新入生における現職教員の内訳は、公立小学校所属5名、公立中学校所属4名、県立特別支援学校所属1名、宇大附属中学校所属1名です。そして、学卒者の内訳は、宇大出身4名、他大学出身3名です。第2期生には、従前以上に、多様な学校種・幅広い年齢層による協働の学修が、期待されています。

ガイダンスの際に松本敏専攻長から、教職大学院での学びについて、「積み上げる学びというよりは、むしろ自分を切り崩す学びになるだろう。」との話がありました。教職大学院では、現職での経験や学部で学んできたことを総括しながら、丁寧に省察をして、自分の実践的力量を再構築していくことを大切に考えています。まさに教師としての「自分くずしと自分づくり」を行うのが、教職大学院なのです。

現職生には、自身の豊富な実践経験があります。学卒生には、教員として伸びていこうとする強い意欲があります。また、教職大学院の2年生は、昨年度の学びをふまえて、1年生の背中をそっと押す準備ができています。協働による学修のよさを本当の意味で活かすことができる体制が、いよいよ本格的に整いました。教室で、そして研究室や院生控室で様々な化学反応が起こることによって、多くのものを生み出していけるよう、院生と教員が一丸となって「協働による学びづくり」に注力していくつもりです。



平成28年度新入生が語る

《宇大教職大学院に期待すること》

(50音順)

- ◇赤木 由喜(現職派遣院生)
*現状打破の力と、新次元へ向かうエネルギーを求められる場にしたいです。学ぶ喜びを存分に味わいたいです。
- ◇荒井 雄貴(学卒院生)
*現職の先生方との授業や授業観察などを通して、多くの新しい視点を得ることができることを期待しています。

◇印南 竜彦(現職派遣院生)

*教育における課題について先生方に学びながら、より自分自身の実践力を高めていきたいと思ひます。

◇内田 祥弘(現職派遣院生)

*これまでの教員生活で積み重ねてきたことを全て打ち壊し、整理して積み直すことができる2年間にしたいです。

◇大武 徹哉(学卒院生)

*現職の先生方と一緒に授業をすることで自分の視野を広げ、2年後に大きく成長できることを期待しています。

◇大森 一久(現職派遣院生)

*先生方の本気と情熱、志の高い仲間との学びを通して、新しい自分を再構築できる2年間にしたいと思ひます。

◇金井 司(現職派遣院生)

*現場で実践してきたことを、最新の教育理論から省察することで、教員としての力量を向上させたいです。

◇久我 逸就(現職派遣院生)

*学びの質を深めるために必要な授業方法や集団づくりなどについて、実践研究することを楽しみにしています。

◇小林 祐輝(学卒院生)

*教職大学院で様々な分野を学び続けるという姿勢を大切にしながら、理論と実践の往還を重ねていきます。

◇金野 大晟(学卒院生)

*教職大学院の教授の方々、そして現職の先生方と共に学び合い、自らの見識を深めていきたいです。

◇齋藤 勝巳(現職派遣院生)

*最新の教育理論を学び、院生同士で協働して課題解決に取り組む中で、教師の専門性を高めたいと思ひます。

◇齊藤 雄輔(現職派遣院生)

*これまで積み重ねてきた実践と理論、経験と思弁を、専門的な学びによって一から練り直して行きたいと思ひます。

◇関 敦巳(現職派遣院生)

*現場での取組みを振り返ると共に、理論を学び実践を通して、応用力をつけたいと思ひます。

◇高橋 裕子(学卒院生)

*素晴らしい先生方や仲間と多様な視点を持って学び合い、多くの発見をしながら教育創造力を育みたい思ひます。

◇田中 真也(現職院生)

*多くの仲間と共に、今までの実践をじっくり批判的に振り返り、新しい価値観に出会いたいと思ひます。

◇中田 陽平(学卒院生)

*現職の先生方と共働して学ぶことにより、私が教員になった際に役立つような力を身に付けたいと思ひます。

◇仁平 由美(現職派遣院生)

*厳しくも本音で語り合い、今までにない新しい視点を持つことのできる大学院生活になることを期待します。

◇野澤 こそえ(学卒院生)

*自分の引き出しを増やしたいです。まずは1日1チャレンジを目標に、出来る限りの恥をかいて学ぶ覚悟です。

「対話」

教育実践高度化専攻教授 青柳 宏

人と人が理解し合うために、そしてよりよい社会、よりよい世界をつくっていくために「対話」が重要であることは誰もが認めることではないでしょうか。しかし、現実には、少なくとも日本の社会の中には、対話することの難しさ、対話することの空しさが広がっているように思われます。例えば、格差社会、そして子どもの貧困が問題として提示されても、本当の「対話」はまだ生まれていないのではないのでしょうか。今の社会の中では、貧困に苦しんでいる人と、苦しんでいない人の間は分断され、貧困に苦しんでいない人は貧困の問題を本気で考えることがなかなか出来ないのではないのでしょうか。貧困を生まない社会にするためにはどうしたらよいかを考えるよりも、自分が貧困に陥らないように抜かりなく生きるしかないと思ってしまう。あるいは、競争社会の中で、他者の貧困をどうにかしなければならぬ、と考えること自体、「偽善」としか思えない人々もいるでしょう。

学校教育に携わる人々も、貧困を生まない社会をつくるための「学力」ではなく、貧困に陥らないために「学力」をつけさせなければならないと考えてしまうのではないのでしょうか。あるいは、そもそも何のための「学力」か、と対話する暇（時間）もなく、「学力向上」を強いられているのが現状ではないでしょうか。

このように、対話することの難しさ、対話することの空しさが広がっているのが現代の日本社会だと思います。しかしだからこそ、苦しんでいる他者と真に「対面」することを「対話」のはじまりとして捉え、そこからはじまる営みをこそ「対話」として定義すべきだと思います。教育の中で、このような「対話」を実践できれば、と思います。

《シリーズ:教職大学院授業紹介⑦ 「教材開発と教育方法の実践と課題」(共通科目[前期])》

この授業では、教科教育の研究成果を基に、児童・生徒・教師の実態に即した教材開発と指導法を考えていきます。その際、学校現場で求められる視点を明らかにし、授業実践例を共同で分析し、改善を図ります。

昨年度の場合は、まず、履修者がどの教科の授業にどのような関心事があるかを話し合いました。それを受け、前半では2人の担当教員(専門は英語教育、数学教育)が言語活動に関わる話題を提供し、履修者は「思考力・判断力・表現力」について教科特有の部分と共通部分についてグループ協議を行いました。後半では、この3つの力を育成する6つの学習活動の観点から、小学校の国語と算数の録画授業を視聴し、6つの学習活動がどのように実践されているかを詳しく分析してみました。その分析を踏まえ、よ



り適切な言語活動が行われる教材と指導法の改善を検討しました。自作教具を披露するグループもあり、充実した発表会が行われました。

以下は受講生の声です。「自分が知らず知らずのうちにいろいろな言語活動を行っていたことに気づき驚きました。そのような意識づけができたので、これからはより充実した児童への働きかけを心掛けたいと思いました」「今まで国語科を中心に言語活動を行ってきましたが、これからは各教科の特性を生かして、6つの言語活動に関わる学習活動をバランスよく実施していこうと思いました」「グループ別の授業改善の討議では、的を絞った改善案が提案され、様々な角度から授業を捉え直すことができ、視点に広がりを持つことになりました」。

(日野 圭子、渡辺 浩行)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻(教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。